Y7-17

和歌山県における1年間のCPA患者1204名の病院前救急活動の分析

日本赤十字社和歌山医療センター　第一救急科部

○千代（ちしろ）　孝夫（たかお）、辻本登志英、山崎　一幸、是永　　章、
浜崎　俊明、中　　大輔

【目的】病院前救急活動のあり方や有用性についての討論は長きにわたり、未だに明確な解答を得ていない。今回、地域の連続全CPA症例を詳細に分析することで病院前の救急活動の現況を把握し、問題点を明確化する。
【対象】平成24年度の和歌山県の全CPA1204名。
【結果と考案】(1)搬送消防署：最多は393名、しかし12本部(71%)では50名以下である、(2)年齢：80歳以上が46%とますます高齢化が進む、(3)バイスタンダーCPR：有りが44%と少ない、第三者の実施は88名のみであった、(4)静脈路確保：施行は32%、うち失敗が36%と多い、(5)薬剤投与：有りが106名(8.8%)であった、(6)病院前の心拍再開：9.3%と少ない、(7)転帰：CPC5が93%、CPC1は32名のみであった、(8)初期心電図：心静止が70%と多くVFは63名のみと少数、(9)PAD：僅か8名であった、(10)心停止の目撃：有りは38%のみであった、(11)原因:疾病が870名（72%）、一般負傷が150名、自損が100名、交通事故が45名、水難22名、労災6名、火災4名、加害3名等であった。疾病が3/4を占め、外傷は少ない、(12)発生場所：居室が53%と最も多い、老人施設が10%もある、浴室が92名と多い、店舗23名、ホテル9名、駅1名など、公共施設は微々たる数である、(13)普段の生活：良好が65%であるのに対して、中等度障害が12%、重度が16%であった、(14)口頭指導：有りが543名もあり、この指導の頻度の多さと重要性が判る、
【結語】当県では、(1)CPA数の地域差が激しい、(2)高齢者、施設からの搬送が増加している、(3)病院前のVFが少ないため心拍再開が少ない、(4)第三者の蘇生行為は伸び悩んでいる、PADも限りなく少ない、口頭指導は重要である、(5)発生場所に公共施設は少ない、(6)外因性は少なく疾病が多い、(7)転帰は満足すべきものではない。

Y8-01

医療安全研修会参加率向上の取り組み

福島赤十字病院　医療安全推進室

○阿部（あべ）　美幸（みゆき）、渡部　洋一、會澤　英子、我妻　　禎、
橋本　健一、野田　　誠

【はじめに】医療安全管理体制の基準として、全ての病院職員は年2回の医療安全研修の受講を義務付けられている。しかし当院では年2回受講している職員は半数にも満たず、平成24年2月に受審した病院機能評価でも改善事項として指摘された。そのため従来の研修会の問題点を抽出して改善を図り、研修会参加率向上を目指して取り組むこととした。
【方法】従来の全職員対象研修会は、年2回（同内容を2回実施するため計4回）開催していた。医療職からは「開始時間が早い、回数が少なく交代勤務だと参加できない」、事務職からは「集合が遅く時間通りに行っても待たされることが多い」等の意見があった。そのため、研修会回数・開始時間・内容・啓蒙方法を見直した。4月初めに年間の研修計画を発表し研修一覧表を配布、年間の研修会が半分終了した時点で各職員に参加回数を明示した。また各研修会の約1か月前に再度研修案内を配布し参加希望者は申し込みをすることにより参加意識の向上を図った。4月の時点で「研修会受講2回未満の職員に対してはレポートを課す」ことを周知しておき、全研修が終了した後にレポートの提出を求めた。
【結果】年2回受講している職員は、平成22年度37％、平成23年度23％であったが、平成24年度は68％にアップした。また、参加2回未満の職員に対して「医療安全研修レポート」の提出を求めたが、レポート提出率は99％であった。
【考察】今年度の研修会開催方法についてアンケートをとった結果「参加しやすかった」という意見が70％であった。今後は受講回数を増やすことだけを目的とせず、受講率のアップが職場の安全文化の向上につながるような研修会を目指していきたいと思う。

Y8-02

当院における研修医に対する医療安全教育

名古屋第二赤十字病院　総合内科[1)]、
名古屋第二赤十字病院　医療安全推進室[2)]、
名古屋第二赤十字病院　教育研修推進室[3)]

○横江（よこえ）　正道（まさみち）[1)]、佐藤　公治[2)]、両角　國男[3)]、小瀬裕美子[2)]、
山口　和宣[3)]

【はじめに】医師免許を取得したばかりの研修医にとって医療の現場は決して安全とは言えず、起こり得る医療ミスや事故を防止する上での医療安全教育は極めて重要である。当院の新採用研修医に対する医療安全教育の取組みを報告する。
【対象・方法】平成25年度採用研修医25名に「自分たちが起こす可能性があるミス」を想像させ、ミスへの対応方法も検討させた。次に、先輩研修医のインシデントレポートを供覧し「実際のインシデント」を提示。患者コンサルテーションを頻回に行う可能性があるためS-BARによる方法も指導した。患者搬送シミュレーションでは入院患者のCT撮影などの業務を行った。搬送上の注意、事故防止策などを検討させた。患者役をストレッチャーに乗せて研修医役と看護師役が検査部門に搬送させた。途中で患者の容態変化などに対処するシミュレーションも行った。
【結果】就業前に研修医が想定できるミスは「コミュニケーションエラー」や「オーダーミス」などの回答あった。対応策としては「とにかく確認」「上級医に相談」などの回答が多かった。シミュレーションからは患者を快適に搬送することのむずかしさ、安全器具の使用の不徹底などを経験した。「非常に実務的で点滴ルートの管理や看護師との連携など医学生時代には全く想像しなかったことを就業前に学ぶことができ良かった」という意見をもらった。
【考察】就業前に起こし得るミスを想像させ、実際のシミュレーションを通して注意点を身をもって学ばせることが重要だと考えた。KYTにもつながる多くの「気付き」を持たせることが今後の事故防止に繋がると思われる。
【結語】就業前オリエンテーションにおいて研修医に医療安全の重要性を学ばせた。

Y8-03

ロールプレイを取り入れた職員研修の取り組み

大津赤十字病院　医療安全推進室

○平野千穂美（ひらのちほみ）、石川　浩三、中村　　一、永福　勝之、
富田　国男、島田　　恵、安藤　賢志、道満　俊成、
秋野　喜史

【はじめに】当院でもH18年から医療法に基づき年2回の全職員対象の医療安全研修を実施している。研修目的は受講者が研修内容を理解し行動変容に繋げることであり、その為には職員が研修に興味を持って参加することが必要である。そこで今回ロールプレイを取り入れた研修を実施し、高い理解度を得ることができたので報告する。
【研修の実際】第1回目「患者誤認事例」、第2回目「コミュニケーションエラー事例」をテーマとして研修を行った。研修は同内容で一日2回の実施を4日間続けて、合計8回行った。内容は医療安全推進室員が患者役と医療者役になり台本に基づいたロールプレイを行うと同時にマニュアルと対照させた説明を加えた。研修後は受講者に5段階で理解度を問うアンケートを実施した。
【結果・考察】第1回目研修の参加率74.9%・理解度4.8、第2回目研修の参加率61.7%・理解度4.7であり、過去6年間の理解度の平均値4.0から上昇した。ロールプレイ中は受講者から笑いもあり活気ある楽しい研修となった。また説明を加えたことでマニュアルに記載されている内容が具体的な行動として受講者の理解につながった。
【おわりに】受講者が研修に興味を持って参加し理解度の高い研修の実施にはロールプレイは効果的であった。引き続きロールプレイ以外にもさまざまなアイデアを出し合って受講者が参加する価値があると思える研修を企画・実施していきたい。